



Data

監督：ウォン・シニョン
脚本：イム・サンウン
出演：コン・ユ/パク・ヒスン/チ
ヨ・ソンハ/ユ・ダイン/キ
ム・ソンギョン/チヨ・ジェ
ユン/ソン・ジェホ/パク・
チイル/キム・ウィソン/ナ
ム・ボラ

👁️👁️ みどころ

韓国に亡命した脱北者はひと月に数百人、年間だと数千人、総数は2万人を超えた。そんな時代状況下、元北朝鮮秘密工作員が脱北者となった理由は？目的は？

平和ボケした日本では考えられない、暗殺、陰謀、濡れ衣、逃亡、復讐等々のキーワードの中で展開される物語は、『ボーン』シリーズにも比肩できるほど迫力満点だ。

その過激な闘いをしっかり味わうと共に、やはりスパイだって人間！そんなラストにも、しっかり共感したい。



■□■南北分断モノ+復讐モノの名作が登場！■□■

韓国映画の南北分断モノは『シユリ』（99年）、『二重スパイ』（03年）（『シネマールム3』74頁参照）、『約束』（07年）（『シネマールム16』134頁参照）、直近ではキム・ギドク監督の『レッド・ファミリー』（13年）（『シネマールム33』参照）等、たくさんある。また、韓国特有の復讐モノには『オールド・ボーイ』（03年）（『シネマールム6』52頁参照）を筆頭としてハードなものが多い。

南北分断の悲劇を扱う場合、北朝鮮側の軍人やスパイ（秘密工作員）はずば抜けた能力を持って描かれることが多いが、それは彼らが韓国を上回る超ハードな特殊訓練を受けているためだ。本作の主人公チ・ドンチョル（コン・ユ）は元北朝鮮特殊部隊のエリート工作員で、今は韓国に亡命した脱北者という設定で、その経歴はストーリー展開の節目節目で必要に応じて明らかにされていく。彼の最初の姿は代行運転の運転手だが、当然それは仮

の姿。彼が脱北した目的は、愛する妻と娘の命を奪ったうえで脱北した男リ・グエンジョ（キム・ソンギョン）を見つけ出し、これに復讐すること。その1点だけらしい。

■本作のウリは、アクションと宿命性■

本作の主人公はこのドンチョル。そして本作のウリは、マット・デイモン主演の『ボーン』シリーズ（『ボーン・アイデンティティ』（02年）（『シネマルーム2』120頁参照）、『ボーン・スプレマシー』（04年）、『ボーン・アルティメイト』（07年）（『シネマルーム16』170頁参照）、『ボーン・レガシー』（12年）（『シネマルーム29』162頁参照））ばりの激しいアクションだ。極限まで肉体改造をした若手イケメン俳優コン・ユの肉体美を見るだけでも、その方面が大好きな女性には十分価値がある。また、近時はカーアクションをウリにしている映画が多いが、本作はまさにホンモノ。無茶苦茶な中にも、なるほど、これはあり！と納得できることまちがいなしのカーチェイスに注目！

さらに本作が面白いのは、ドンチョルがリ・グエンジョを追う追跡者であると同時に、対北情報局から追われる容疑者になるという二重の宿命性だ。『ボーン』シリーズでは、1人で行動するジェイソン・ボーンの計算されつくした姿が印象的だが、それは本作でも同じ。もともと、ドンチョルの場合はボーンのようにパソコンを含む高度なITを駆使したスパイ活動ではなく、自らの肉体とカンだけを頼りとする孤独な行動(?)だから、見ていてハラハラさせられることが多いが、とにかくその敏捷性と格闘能力には脱帽。

パク・コノ会長（ソン・ジェホ）は脱北者を支援する会の会長だが、ドンチョルを見ると、北に残してきた家族を思い出すらしく、さまざまな支援をしていた。ところがある日、そのパク会長が就寝中に何者かに襲われて死亡。異様な気配を察したドンチョルがパク会長の部屋に急行したところで激しい格闘が演じられたが、暗殺者を葬った後、ドンチョルが虫の息状態のパク会長から預かったのがメガネ。パク会長は「頼む、必ず埋めてくれ・・・」と言い残して死亡したが・・・。

■韓国特有の組織に注目！2つのエピソードにも注目！■

パク会長は脱北者の情報を一手に握っていたから、ドンチョルが復讐のために捜している男リ・グエンジョの情報も把握していたらしい。そこで、ホントはそんな私情を挟んではダメなのだろうが、ドンチョルに対してそっとリ・グエンジョの住所を書いたメモを渡してやったから、ドンチョルは大喜び・・・？もともと前述のように、パク会長が殺害される現場に乗り込み、暗殺者をやっつけたものの、殺害現場に居合わせていたため警察からはドンチョルがパク会長殺害の容疑者とみなされて追われる立場に。

ここで面白いのが、この捜査の指揮をとるのが普通の警察ではなく、対北情報局のキム・ソッコ室長（チョ・ソンハ）とされていることだ。さらに、脱北者であるドンチョルを北のスパイだと決めつけたソッコ室長は、その追跡も普通の警察ではなく、防諜分野の大ベ

テラン、ミン・セフン大佐（パク・ヒスン）に命じたところも面白い。こちらあたりは韓国特有のシステムだから日本人にはわかりにくい、本作ではその違いをしっかりと理解することが不可欠だ。

本作では、面白い回想話（エピソード）が2つあるので、それにも注目。その1つは、もともと同期生だったが、一方は金と地位を追い求めて現在の地位に登りつめたソッコ室長と、他方は北がからむ武器密輸取引の一掃作戦失敗の責任を取らされて左遷され、現在は特殊部隊教官の地位にあるセフン大佐との因縁だ。もう1つは、北がからむ武器密輸取引一掃作戦の現場で闘ったドンチョルとセフン大佐との因縁だ。韓国特有の組織の中で生まれる、彼らの人間臭さに注目したい。



©2013 SHOWBOX/MEDIAPLEX AND GREEN FISH ALL RIGHTS RESERVED. 配給：ツイン
9月27日（土）よりシネ・リープル梅田、シネ・リープル神戸ほか全国順次ロードショー

■□ストーリーのポイントは？メガネに隠された秘密とは？■□

本作のストーリーのポイントは、死亡したパク会長がドンチョルに預けたメガネに隠された秘密。本作の中盤から登場する、テレビ番組プロデューサーで元・大手メディアの女性記者チェ・ギョンヒ（ユ・ダイン）とドンチョルが共闘（？）する中で明白にされるのは、このメガネに隠されたチップには、北に送る秘密兵器の製造方法が書かれているらしいこと。したがって、これを北に売れば北から莫大な対価をもらえることは確実だが、なぜそれをパク会長が持っていたの？また、殺される寸前に彼がドンチョルに対して「頼む、必ず埋めてくれ・・・」と言い残したのは一体なぜ？

本作後半からクライマックスにかけては、このちっぽけなチップに何が書かれていたの

かをめぐって、スケールの大きな物語が展開していくので、それに注目！北朝鮮が核開発と共にアメリカにまで届く長距離弾道ミサイルの開発に力を注いできたことはよく知られているが、同時に慢性的な食糧不足に苦しむ北では食糧の確保が大きなテーマ。そのため、痩せた土地でも立派に育つ麦の生産や、その品種改良も大きな課題だが、問題のチップの中に書かれていたのは、ひょっとして・・・？

■□■暗躍する「脱北者ビジネス」とは？その黒幕は？■□■

本作冒頭には「韓国に亡命した脱北者はひと月に数百人、年間だと数千人、総数は2万人を超えた。だがその多くは、生き残るために利用されているという・・・。」というナレーションが流れる。そして本作では、暗殺、陰謀、濡れ衣、逃亡、復讐をキーワードとした韓国映画特有のストーリーが矢継ぎ早に展開していく。日本では現在、北朝鮮による日本人拉致問題の最終解決に向けて関係者の間で協議が重ねられているが、依然としてその先行きは不透明だ。しかして、あなたは韓国内で暗躍する「脱北者ビジネス」の存在を知ってる？それを把握しているのは公安関係者だけだが、本作におけるパク会長の民間人としての脱北者支援の活動やソッコ室長の暗躍ぶりを見れば、その一端を理解することができる。

本作は2時間17分という上映時間の中にさまざまなものを詰め込んでいるので、ちょっとでも居眠りしていると、たちまちストーリー展開が読めなくなってくる。とりわけ難しいのが、対北情報局で同期だったというソッコ室長とセフン大佐の生き方の違いと、それによる現在の立場の顕著な違いだ。捜査の指揮をとるソッコ室長が、ドン Chol へのリベンジに執念を燃やすセフン大佐を抜擢した（復帰させた）のは、きっと正解。だって、それによって「水を得た魚」のようにセフン大佐は活躍し始めたのだから。ところが、セフン大佐の補佐役となった一見お調子者のチョ大尉（チョ・ジェユン）が、少しずつセフン大佐の魅力に魅かれてソッコ室長を裏切り始めたのはソッコ室長の誤算だったはずだ。ドン Chol が復讐のターゲットとしたリ・グァンジョは、ソッコ室長の管理下に置かれた脱北者集団『北進会』のメンバーだったことが判明するとともに、ソッコ室長がソン・サングン専務（パク・チイル）やシン次長（キム・ウィソン）と結託して、いかにえげつない「脱北者ビジネス」を展開していたかが、少しずつ明らかにされていくから、それに注目！

そんな中、セフン大佐ですら少しずつソッコ室長に疑惑の念を抱くとともに、ドン Chol に対する信頼のような不思議な感情が生まれてきたのは自然な流れだが、それを突き進めていけば、セフン大佐にも「共謀スパイ罪」の容疑がかかり、ドン Chol と共に処分される危険が・・・。さあ、少しずつあのチップに書かれていた秘密が明らかにされていく中、最後の対決はいかに・・・？

■□■復讐を達したドンチョルの次なる目標は？■□■

本作は、予算がハリウッド映画と同じなら『ボーン』シリーズと同じレベルを目指したそうだが、比較的小規模な予算の映画にしては、公開1か月で420万人動員だから大ヒット。近々公開されるキム・ギドク監督の『メビウス』（13年）はセリフが一切ないのが特徴だが、本作でもウォン・シニョン監督はドンチョルのセリフを極力カットし、表情とアクションだけでその「思い」を伝えようとしている。回想シーンとして登場する、3%しか生き残れないというスパイ訓練場「虎の穴」での猛訓練のシーンや、金正日から金正恩への権力承継の中で無用とされたドンチョルが限界までいじめられる(?)シーンでは、セリフは全く登場しない。また、チェ・ギョンヒを同乗させたうえで2度にわたって登場する激しいカーチェイスのシーンでも、ドンチョルのセリフはゼロだ。

本作ではドンチョルは最初からリ・グァンジョの住所を教えてもらっているから、パク会長殺しの容疑者とされながらも、リ・グァンジョの追跡者としての行動は比較的容易。そして、その決着をつけるシーンを、チップ争奪戦のストーリーと結びつけたのは一石二鳥だ。ドンチョルとリ・グァンジョとの格闘シーンは見モノだが、その結末は見えている。したがって、そこでのポイントは、息も絶え絶えのリ・グァンジョから、遺言として聞かされた「娘は生きている」という衝撃的な言葉だ。妻（ナム・ボラ）の死体はドンチョル自身の目で確認しているが、幼い娘はソッコ室長の手を通じて中国人に人身売買されたらしい。

それはホント？ そうだとすると、何が何でもソッコ室長をとっつかまえて、娘を誰に売り飛ばしたのかを聞き出さなければ！ それがドンチョルの次なる目標になったのは当然だが、さて、それをどうやって・・・？

■□■三つ巴対決の行方は？■□■

本作でソッコ室長が公式に記者会見している姿を見ると、マスコミ報道がいかにもインチキなものかがよくわかる。しかし、今や2度のカーチェイスを含め、ドンチョルと共有する時間をタップリと持った(?)チェ・ギョンヒは、誰よりも「情報通」になっていたから、韓国国民にとってはこのチェ・ギョンヒの声から発せられるニュースの方がよっぽど価値があることは明らかだ。他方、ドンチョルはチップに隠された秘密やソッコ室長による「脱北者ビジネス」のインチキ性の暴露以上に、何としてもソッコ室長をとっつかまえて娘の人身売買の真相を聞き出さなければならなかったから、ここでも彼の行動は直線的だ。ソッコ室長が記者会見している場に、1人帽子で顔を隠しただけで乗り込んでいく姿はカッコいいが、さて、その後に展開されるセファン大佐を含めた三つ巴の対決の行方は？

ソッコ室長は上層部と密接に繋がっていたから、狙撃犯を含む国家権力の援護は十分。また、セファン大佐も微妙な立場ながら、チョ大尉の絶妙の「応援」を受けて、それなりの

立場をキープ。それに対して、孤立無援の闘いを強いられているのはドンチョルだけだが、ドンチョルには娘が生きていることを確認し、その在り処を聞き出すという目標があるから、その行動は一貫している。本作のクライマックスとなる三つ巴の対決は、あなた自身の目でしっかりと確認してもらいたい。

■□■ちょっとした配慮で、思いがけない結末に！■□■

精密機械のような殺人マシンだったドンチョルの内心に変化が見え始めるのは、娘が生きていると聞いてから。他方、ドンチョルへのリベンジに燃えていたセフン大佐の内心に変化が見え始めるのは、悪いのはソッコ室長であって、ドンチョルは意外といい奴・・・？ そんな理解ができるようになってからだ。三つ巴の闘いの結果、ソッコ室長は娘の所在について口を割らないままドンチョルの銃弾によって倒れたし、ドンチョルはセフン大佐によって逮捕されてしまったから、これにてストーリーは消化不良のままジ・エンド・・・？ いやいや、そんなバカなことはないはず。ここからラストに向けて、思いがけない感動的な結末が訪れるはずだ。

それが実現できたのは、セフン大佐による粋な配慮の結果。これは男同士の闘いを続ける中で、結局セフン大佐はドンチョルを男の中の男として認めたということだ。これには、ずっと側面からセフン大佐の支援に回っていたチョ大尉もビックリだが、彼は本作ではあくまでストーリーの引き立て役だから、彼の立場は無視でOK。これによってセフン大佐はまた多少の「処分」を受けるだろうが、それは覚悟の上。

日本には「武士の情け」という言葉があるが、セフン大佐がドンチョルの娘の在り処を1枚のメモで教えたのもそれ。そんな思いがけない展開の中、本作ラストには「工作員だって人間！」というストーリーが展開していくことに。

■□■工作員だって人間！ラストはそんなストーリーに！■□■

本作ラストには、私が2010年に3月に定遠艦景区と定遠号の見学に赴いた山東省威海を舞台に感動的なシーンが登場する。「お母さんのお腹の中に赤ちゃんがいる時に父親のことを何度も話しかけていると、生まれてきた子供は父親の顔がわかるのよ。」北で幸せに暮らしていた時、妻はドンチョルに対してそう語り、さかんにお腹をさすりながら「パパは・・・。パパは・・・。」と話しかけていたが、今、麦の穂が揺れる中で1人の女の子と向かい合ったドンチョルは・・・？

ここでも、何のセリフもないのが本作のいいところ。女の子も決して美人ではないが、その目とその表情だけの演技は抜群だ。これはラストシーンではないが、さて、本作のそんなシーンの「美学な幕切れ」度は？

2014（平成26）年10月7日記